

橋本信也・前沢政次 編集

介護保険ハンドブック かかりつけ医のために

徳永 力雄（関西医科大学教授・衛生学）

2000年4月からの介護保険のスタートは、単に福祉行政の改革というに留まらず、わが国の保健医療のあり方や経済の仕組みにも影響する、画期的でかつ極めて重要な社会政策の施行を意味している。医療界では、一部の関係者を除いて、「お年寄りの介護が保険で行われるようになる……」といった程度の軽い気持ちで受けとめられている気配があるが、この制度が動き出すと38年前に国民皆保険が達成された時以上に、広範囲にしかも長期的にいろいろな変化が現れるのは必至であろう。

このような時期に、橋本信也先生と前沢政次先生の編集で、かかりつけ医のためにと銘打った本書が出版されたことは、誠に時宜を得ている。かかりつけ医ばかりでなく、病院や大学の勤務医、医学生にとっても大いに有益な本と思われる。

本書は、9人の著者の分担で8章と資料編から構成されている。200頁に満たないにもかかわらず、よく練られた章立てで、取っつきやすく、分かり易く、要領よく記述されており、介護保険制度の概要が短時間で把握できるように工夫されていると感服した。

第1章は、高齢者ケアに求められる理念と題して、症例、ケアの概念、ケアのあり方について説明している。第2章は、介護保険制度の概要を行政の立場から解説しているが、形式的でなく要点がよくわかる。第3章は要介護認定と医師の役割について述べ、要介護認定という文字どおり医師が果たす最も重要で責任を伴う任務について簡明に示されている。第

4章は、チームで行う介護の柱となるケアプランの作成の実際について、また第5章ではケアマネジャーの課題についての確簡潔に説明している。第6章は、介護保険にかかわる職種とその役割について、各職種の専門性と職種間の協調と連携の重要性が読み手にすっと伝わってくる記述となっている。第7章は介護保険施設とその機能について、福祉と医療の統合のための今の時点における各施設の機能が紹介されている。最終章の第8章は、要介護高齢者に対する医学的管理と題し、高齢者の生理、症候、頻度の高い疾患、薬物治療、リハビリテーション、インフォームド・コンセントに分けて要点が記されている。

言うまでもなく、介護にかかわる知識と技術は年々蓄積されており、また介護保険制度に限っても審議中の事項も含めて医師が知っていなければならないことは多い。それらを、総括的に紹介している成書も多いが、制度がスタートせんとしている現時点においては、まずは制度の形と内容を知り、それを支えるマンパワーとその役割を知ることが大切である。とりわけ臨床医は、これまであまり馴染みのない福祉に意識を向け、自らのこととして受けとめながら実践に入っていくことが求められる。そのような意味で、本書は、この道の一流の専門家が分担記述した身近で実効的な入門書となっている。好書として推薦したい。

(A5 頁200 2,400円＋税 1999 医学書院刊)